

## 『2013 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、2007 年度から法政大学の全学部を対象として毎年実施している学生生活実態調査の 2013 年度の結果をとりまとめた報告書です。

昨年度の報告書でも指摘しましたが、近年においては各問に対する学生諸君の回答にあまり大きな変化はありません。本年度についても、概ね安定した傾向を認めることができます。しかし、現実の学園生活においては、かつての法政大学を知る者には想像もつかないような事件が発生し、被害者のみならず加害者としても本学の学生が登場するなど、大きな様変わりを痛感させられることもあります。本調査結果に現れているように、大多数の学生は、それぞれ近い年代の学生と共に比較的色合いの似た学園生活を過ごしているものの、一方ではアンケート調査の集計には現れにくいほど極めて少数ながらも、健全な集団生活を踏み外す学生も同時に存在すると言わざるを得ません。

とまれ、本年度の調査結果から特徴を示していると思われる項目を抜粋してみましょう。まず、自宅通学にこだわりを示す傾向が堅持され、多少通学に時間がかかってもそれを厭わない傾向が見られます。ただ、この背景には経済的諸条件の悪化が潜む、とは簡単に決めつけられません。アルバイトの経験を尋ねた質問には「ある」という回答が 84.6%もの高率を占め、2010 年以降では最高の比率になっていますが、アルバイトに費やす時間が増えているわけではありません。また、回答形式が多少異なりますが 2003 年度に実施された調査では月に 6 万円以上稼ぐ者が 42.2%を占めていましたが、今回の調査では 37.0%に減少していますので、その収入も伸びているとは言えません。アルバイト収入の用途については複数回答方式に揃えられた 2007 年度以来 2010 年度に服飾費と食費が第 2 位第 3 位を入れ替えただけで第 5 位までの順番はほぼ変わっていません。奨学金を受けている者の割合は高くなっていますが、奨学金を「必要としている」という学生の比率はむしろ低下しています。

「学生生活上の悩み・不安」については V 字回復を認めた昨年度に精査の必要を指摘しましたが、本年度にも昨年からの大きな変化は見られず「友人・異性関係」や「進路・就職」に関する「悩み・不安」の割合は、横ばいもしくはさらに低下しています。「悩み・不安」の種類別の順位は例年ほぼ同様の傾向を示しています。ただ、相談相手として「先輩・友人」の割合が減少傾向にあることが少々気になります。一方、学生相談室の心理カウンセラーによる相談業務の認知度は確実に高まっているようです。

「モラル・マナーの低下・欠如を感じますか」という問に対して、「感じる」という回答の比率が下がったことについて、昨年「数字を素直に受け止めることができない悲しさ」を述べましたが、今年度はさらに比率を下げています。本当にモラル・マナーが向上したのでしょうか。それとも感性がさらに麻痺したのでしょうか。前者であれば良いのですが。

学生センターでは、さらに次年度も調査を継続する予定です。学生生活支援の基礎資料の 1 つとして、本調査がお役に立てば幸いです。

2014 年 1 月

学生センター長 宮崎伸光